

より十歳くらい若い女性の友人がいます。東大で英文学を学んだ人です。この女性が「女性に母性は無い」というのです。母性というのは子供が生まれて育てていく間で培うものであり、生まれながらにしてあるものではないと。だから培うチャンスに恵まれない人は児童虐待に陥ってしまうわけです。児童虐待を母性の有無で非難するのは不適切であると。本性論の落とし穴ですね。性善説は生きる勇気を与えます。

藤樹さんの次の世代の人に盤珪永琢という臨済宗のお坊さんがいます。播州生まれの人です。この人は「不生禪」を唱えました。仏性は生後に育てなくとも、誰もが生まれながらに持ち合わせており、ありのまままで仏性にあふれているのです、という提唱です。この盤珪永琢さんの提唱を聴いて、特に差別されていた人達は、今のままで私も救われるのですね、と歓喜の涙を流しました。性善説の場合も同様の論法です。

悪の問題を個人的にあるいは社会的にどのように理解し対処したらいいのか、複雑な問題ですから、一概に言えないのですが、藤樹さんは一つの提案をしたわけです。

藤樹さんが門人に与えた書簡については先に述べましたが、門人の人達の質問には身につまされることが



あります。上役に嫌いな宴会に誘われた時にはどのように対処したらよいかとか。少年の性欲の苦悩とか。それに一一丁寧な返辞を書いていきます。但し、書簡に出て来る用語は同時代の中国の王陽明や王龍溪などが使用したものが多用されています。それは、今の日本人の言語感覚で読んでは本意をくみ取れないのです。一例を挙げます。「退屈する」という言葉がしばしば使われています。今は「暇を持てあます」という意味に用いられますが、退屈の二字をよく見て下さい。「退き屈する」という意味です。直面している課題を放棄して安逸さに逃げる、という意味です。藤樹さんは「退屈するな」と

しばしば門人に叱咤激励しています。宿題から逃げるな。課題を過小評価して自分が放棄しても事態はさして変化しないと勝手に決め込んで無視したり、課題を過大評価して自分にはとても担いきれないとみて逃避するということはしないで、それぞれに目前の事実を冷静に判断して、自分のやるべきことなら、ここまでやれると考えて、初めから課題から逃げるなど。今でもこの考えは生きていると思います。

知識や技術は生き延びるために不可欠です。それを身に付けるのが学習です。しかし、身に付けている知識や技術を改めて問い直すことも大事です。それを学問と言います。学びて問う。学問は学者だけがするのはありません。生活者こそが良く生きるために問い直す事が肝心なのです。

私たちが、日々生きる、より良く生きるためには、学習と学問を実施するわけですから、持て余す暇など無いのです。今は情報化社会です。与えられる情報を鵜呑みにしないで、賢く選択することが大事です。私たちはそれとは気づかず学習と学問を日常生活の現場で実践していることになりません。

小生は、認知症にならない限り、正常な判断ができる間は、「退屈は

しない」で死ぬまで人間らしく生きてゆきたいと思えます。他者と折り合いをつけながら生きていくためには、心の学び藤樹塾というのが鍵になると思えます。人間らしく生きることを目指して切磋琢磨するのが「こころの学校」です。身に付けている知識や技術が自分達がより良く生きるために本当に適切なのかどうか、これは一人一人問い直さなければなりません。そのような生き方を他者と共に生きたいというのが藤樹さんの精神ですね。

今日の話はあちこちと飛びましたためにお聴き苦しいこともあったか思います。また機会がありましたら参ります。その時を楽しみにして、今日の話は終わります。ご清聴ありがとうございました。(終わり)

昨年六月十一日に開催しました「中江藤樹心のセミナー」で、吉田公平先生にご講演いただきました。その講演内容を淵田豊明副会長によって文章化され、前号と今号に分けて掲載しました。

お知らせ

次号(5月号)から、新しく吉田公平先生にコラムを連載していただくことになりました。お楽しみにしてお待ちください。